

胡適『嘗試集』の第一編について

王 艶珍

1. はじめに

胡適(1891－1962)は白話文を提唱した人物としてよく知られている。胡適の文学革命運動における役割は十分認められていると同時に、その時期の彼の創作はそれほど知られていない。胡適の創作は新詩だけではないが、『嘗試集』(陸遊の詩「嘗試成功自古无」の反対の意味をとったもので、「嘗試」は試しにちょっとやってみることをさす)は中国で最初の白話詩の詩集であり、『嘗試集』の作者胡適は新詩に力を入れ、実験の精神で新詩を試作した。

『嘗試集』は1920年3月に上海亜東図書館によって初版が出版された。『嘗試集』の初版は第一編と第二編に分けられる。第一編は1916年7月から1917年9月まで、北京に帰国する前のアメリカ留学中に作られた白話詩である。第二編は1917年から『嘗試集』の初版が出版されるまで、北京に帰国した後に作られた白話詩である。1916年7月以前アメリカ留学中、胡適が作った文言詩は「去国集」に収録され、『嘗試集』の巻末に付けて第一編と第二編と併せて出版されている。1920年9月に『嘗試集』は再版され、六首の詩を加え、翌1921年三版が再版と同じ内容で出版され、1922年10月に増訂四版が出版された。『嘗試集』の詩の中には初版で発表され、第四版で削除された新詩もある。

今まで胡適の新詩に関する評価は新詩の発展途上における歴史的価値があると認めながら、その詩自身の価値は高くないという認識が有る。しかも、胡適の新詩について誰も詳しく取り上げ、その後研究してない。胡適の新詩が現代詩にどのような影響を与えたのか等、胡適の新詩の評価について認識の不足が感じられる。本論では安徽教育出版社の『胡適全集10』²の『嘗試集』第一編の詩を取り上げ、胡適が削除した真意を探索し、胡適の新詩についての評価を考察する。そして、旧詩の伝統的な五言詩、七言詩と比較し、文言詩に影響された詩から新詩に変わる過程を明らかにする。

『嘗試集』第一編の詩は旧詩の継承と乖離のどちらの成分が多く占めている

のであろうか。当時の背景を踏まえて、判断の基準として二つの尺度を設け、『嘗試集』の第一編を考察してみる⁴。胡適の白話詩の作法⁵もあるが、第一編の分析については押韻の問題を尺度に入れて考察する。

第一の尺度——詩のリズム

第二の尺度——西洋詩法の応用

『嘗試集』の第一編に基づいて詩のリズムを分析し、「胡適之体」が形成される過程、旧詩からの継承があるか否か、西洋詩の影響があるか否かを考察する。胡適の創作において、旧詩的なものから新詩に至る変化に注目し、主に旧詩の韻律(リズム)と比較して、「胡適之体」の形成する過程を明らかにする。

第二の尺度の西洋詩法の応用とは範囲が広く、明確な基準を決めることが難しい。しかし、中国の新詩の発展において、西洋詩の影響は無視したくても、無視できないものである。五・四運動時から、胡適も含めて中国の詩に新しい生命を注ごうとする詩人達は西洋詩を翻訳しながら、各種の西洋詩法を学び、模倣して新詩を作ってきた。この理由に基づき、『嘗試集』の第一編を分析するとき、西洋詩法の基準は国、韻律、形式にこだわらないで、中国の伝統的な詩において無かったものが新詩の中に表れたら、その無かったものと西洋詩との関係を明らかにしてみたい。

2. 『嘗試集』の第一編

第一編では、主に「蝴蝶」⁶、「他」⁷、「贈朱経農」⁸を取り上げ、考察する。「再版自序」⁹で胡適は、「蝴蝶」と「他」以外の詩に旧詩の影響が有り、特に「朋友篇」を「去国集」に入れてもよい、と自分で認めていた。しかし、第四版の『嘗試集』に「他」を入れずに、削除した。このことから、胡適は新詩に関する認識が変化し、「他」の詩を読者に見せることを避けたと推測できる。また「蝴蝶」を残したのは、アメリカで白話の詩を作る努力をし、試みた創作を抹殺できなかったのであろう。胡適は「四版自序」で以下のように述べた。

その中にはまだ多くの纏足の靴のような姿があるが、しかしその保存はもしかしたら纏足した人が足を解放する苦痛を人に分からせるかもしれない。もしかしたらまたいささか歴史的用途があるかもしれない。だから、私は(第一編の詩を)忌み嫌わない。¹⁰

第一編において、旧体詩七言詩と形式が似る七言の詩は三首がある。「孔丘」、

「贈朱経農」、「中秋」という三首の詩である。「孔丘」と「中秋」の詩句は4行だけしかなく、そのため、「贈朱経農」を選んで、二つの尺度により考察する。

2.1. 第一編の詩のリズム

『嘗試集』は胡適の最初の詩集であり、「蝴蝶」という詩は胡適の白話詩の第一作である¹¹。最初「蝴蝶」を読むと、第一印象は白話で書いた詩だが、形式と韻律から見ると旧体詩と変わらない。『新青年』には「蝴蝶」という題名ではなく、「朋友」という題名で発表された。『蔵暉室札記』巻十四によると、「朋友」という題名の前に、その詩の題名は「窓上有所見口占」である¹²。単に「窓上有所見口占」という題名を見ると、旧詩と思われるかもしれない。「朋友」と変わると同時に、旧詩の雰囲気が題名から見えなくなった。

胡適の初めての白話詩であるため、「蝴蝶」と中国伝統詩の五言詩と比較してみれば、「蝴蝶」には旧詩の影が見える。しかし後述のように、現代人の直接的な表現方式を用い、大胆に西洋詩の配列を模倣したことが分かる。この節においてはリズムについて分析してみたい。西洋詩の配列を模倣したことは第二尺度の節でまた詳しく説明する。特に「俗語俗字」を用いたことだけでも、旧詩を作る人に詩だと思われぬはずである¹³。易竹賢の『胡適伝』によると、黄侃は胡適をよく思っておらず、同時に白話文、特に白話詩を全く評価していなかった。そのため、黄侃は胡適を「黄蝴蝶」と呼んでいた¹⁴。

第一編の22首の詩の中に、旧体詩五言詩と似る10首の五言の詩が有り、およそ第一編の詩の半分を占めている。五言詩の伝統詩のリズムと比較するために、旧体詩としてよく知られている典型的な作品を見ることにする。当然例外的な五言詩のリズムが存在しているが、しかし極めて少ないので、比較する時に例として考えない。次に取り上げる二つの詩は旧体詩規則にあてはまる作品である。

I 白日 依山尽， 黄河 入海流。

欲窮 千里目， 更上 一層樓。

(王之涣「登鶴雀樓」)¹⁵

国破 山河在， 城春 草木深。

感時 花濺淚， 恨別 鳥驚心。

烽火 連三月，家書 抵万金。

白頭 搔更短，渾欲 不勝簪。

(杜甫「春望」)¹⁶

以上の詩は従来中国人によく知られている伝統的な五言絶句と五言律詩である。声を出して吟じてみると、五言詩特有の「○○—△△△」(二・三)のリズムが容易に感じられる。

「蝴蝶」と「他」のリズムを調べ、伝統的な五言詩と比較する。また、「他」を『嘗試集』の第四版に入れずに削除した理由も考察してみる。以下は「蝴蝶」と「他」のリズムである。

「蝴蝶」

兩個 黃蝴蝶，雙雙 飛上天。

不知 為什麼，一個 忽飛還。

剩下 那一個，孤單 怪可憐；

也無心 上天，天上 太孤單。

「他」

思祖国也

你心裏 愛他，莫說 不愛他。

要看 你愛他，且等人 害他。

倘有人 害他，你如何 對他。

倘有人 愛他，又如何 待他。

以上の分析を見ると、「蝴蝶」のリズムは伝統的な五言詩とほとんど同じ「○○—△△△」(二・三)というリズムであり、最後の行の前半だけリズムが外れ、旧詩と違う「●○○—△△」(三・二)というリズムである。リズムの違いが少ないと言ってもいいであろう。反対に「他」のリズムは一行の後半と二行の前半だけが五言詩のリズムと同じで、それ以外のリズムは「●○○—△△」である。旧詩の五言詩のリズムと大部分違うことが分かる。「蝴蝶」のリズムと比べて、旧詩のリズムとの比較だけを見ると、「他」は「蝴蝶」より旧詩のリズムが少ないと言える。そして、第一編において、十首の五言の詩が有り、「江上」、「寒江」、「景不徙篇」という三首の詩が伝統的な五言詩と同じ「○○—△△△」というリズムである。それ以外の7首の詩には伝統的な五言詩の「○○—△△△」というリズムと、「●○○—△△」というリズムがある。

胡適は『嘗試集』の再版で、自分の詩作について評価し、本当の白話の新詩と、そうではない新詩を区別していた。そして彼は勝手に喝采する読者がいるので、読者が良くないところを良いと思って、真似して新詩を作ったら、読者に良くないと述べている¹⁷。

「再版自序」を書いた1920年から「四版自序」を書いた1922年の二年間を通し、新詩を作る人も段々増えていく。例えば、1921年郭沫若の『女神』が出版され、1922年俞平伯の『冬夜』が、1922年汪静之の『蕙之風』が出版された。当時新詩に関する理論が多く発表され、胡適もその影響を受けて新詩に対する考え方が変わっていったと思われる。また、「四版自序」によると、魯迅、周作人、俞平伯などの友人が『嘗試集』の詩を削除することに参加したことが分かる。それでは、「他」を『嘗試集』の第四版に入れずに削除した理由は何であろうか。胡適の新詩についての考えが変わったから、自分で「他」を削除したのか、魯迅などの友人の中で誰かが「他」を削除することを勧めたのか、明らかでないが、しかし新詩の発展がそこにかがわれる。リズムだけをみると、「他」を削除した理由は明確ではないので、次の尺度(西洋詩法の応用)でまた考察してみる。

「蝴蝶」と「他」の中で、「為什麼」、「如何」、「也」、「太」などの現代中国語(白話)中の疑問詞、副詞も使われ、「愛」という直接的な感情を表す言葉も使われている。これは文学革命運動以前の伝統詩法と表現方式においてはあり得ない言葉の使われ方である。これは旧詩の「詩」の言葉と比べてあきらかに「蝴蝶」と「他」の詩句が「大白話」(大衆向きで分かりやすい言葉)であることを示す。旧詩は人に想像の空間を与えること、即ち詩の境地に意を用いていたが、「蝴蝶」、「他」の意味は一目瞭然の詩と言える。だから、胡適の詩は最初から分かりやすい特色がある。また、胡適はアメリカで七年間の留学中に、西洋人の直接表現方式を体得し、習わなくても自然に身に付けたと思われる。

つぎに、伝統詩の七言詩を分析するために、旧詩としてよく知られている典型的な作品を見てみる。

I 少小 離家 老大回， 鄉音 無改 鬢毛摧。

兒童 相見 不相識， 笑問 客從 何處來？

(賀知章「回鄉偶書」)¹⁸

II 相見 時難 別亦難， 東風 無力 百花殘。

春蠶 到死 絲方盡， 蠟炬 成灰 淚始乾。

曉鏡 但愁 雲鬢改， 夜吟 應覺 月光寒。

蓬萊 此去 無多路， 青鳥 殷勤 為探看。

(李商隱「無題」)¹⁹

これらは「〇〇—〇〇—△△△」(二・二・三)という七言絶句と七言律詩の特有のリズムである。「贈朱經農」は十七行有り、前の2行と最後の4行だけを取り上げて、伝統的な七言詩と比較し、リズムを考察してみる。

贈朱經農

六年 你我 不相見， 見時 在 赫貞江邊；

握手 一笑 不須說： 你我 如(于)今 更少年。

.....
更喜 你我 都少年， 『辟克匿克』 來江邊。

赫貞江水 平可憐， 樹下 石上 好作筵。

黃油 麵包 頗新鮮， 家鄉 茶葉 不費錢，

吃飽 喝脹 活神仙， 唱個 『蝴蝶兒 上天』！

「贈朱經農」の中には、「〇〇—〇〇—△△△」(二・二・三)というリズムだけでなく、「〇〇—〇—▲△△△」(二・一・四)、「〇〇〇〇—△△△」(四・三)、「〇〇—〇〇●—△△」(二・三・二)という三つのリズムも存在する。第一編の詩の中で、伝統的な七言詩のリズムを含めて四つのリズムがあり、「贈朱經農」には多種類のリズムが存在している。また、「孔丘」には「亦“不知老之將至”」「●—〇〇—△△△△」(一・二・四)というリズムがある。「中秋」は完全に伝統的な七言詩と同じ「〇〇—〇〇—△△△」というリズムだけがある。

そして、「贈朱經農」が『新青年』²⁰で発表された時、第二行の後の詩句は「你我一如今一更少年」であった。『胡適全集 10』の「贈朱經農」は「如」の代わりに、「于」が使われている。即ち、「你我一于今一更少年」になっている。「如」から「于」になる理由について記述してないが、「如今」と「于今」とは両方とも「現在」という意味である。「如今」は過去のある時期と比べた現在のかなり幅のある時間を言う²¹、「于今」は(…して以来)現在までを指す²²。ここから、微妙な区別の字まで胡適が推敲したと分かる。例えば、「四版自序」では「一笑」の順序だけ友人からアドバイスをもらって変えたと述べている。

上記のように、「贈朱經農」で胡適は種々のリズムを試し、詩の字を推敲した。それだけではなく、胡適は音訳した「辟克匿克」(=ピクニック)を用いた。「郊游」という中国語では表わせないのか、或いは、「郊游」は二文字だから、七言の詩に合わせるために「辟克匿克」を用いたか、あるいは胡適が創意工夫をこらしたか、理由ははっきりとは分からない。但し、『新青年』で彼は『辟克匿克』一來江邊」の後に「ピクニックは、Picnic、食物を持ち外に遊び、即ち遊んだところで食べる。この意味である。」(辟克匿克者、Picnic 携食物出游、即於游處食之、之謂也)と説明している。だから、当時の中国では、アメリカ的なピクニックという活動がないし、「郊游」という言葉では表わせなかったことが理由の一つとしてある、と理解してもよいであろう。

2.2. 第一編の西洋詩法の応用

ここまで、リズムを通し、第一編の白話詩を分析してきた結果、伝統的な詩法で作られた白話詩が多いと言える。では、第一編の白話詩の中で、第二の尺度西洋詩法の応用が存在しているか否かを、もう一度「蝴蝶」、「他」、「贈朱經農」をとりあげ読みなおして分析する。

『新青年』第2巻第6号で発表された原文を調べると、胡適の意図が明らかになる。「蝴蝶」は当時の中国知識人の詩の作り方の常識を破り、新詩の道を開いた記念的作品だと言える。この点を具体的に検討してみたい。また、「蝴蝶」と「他」が『新青年』で発表されたもとの形は正式な句読点を付けてなく、字の横に圈点を付け、特に圈点が一句の終わりだけではなく、句切りの字以外の字の横に付けられている。行を分けただけで、縦書きで植字されている。そのため、「蝴蝶」と「他」とのリズムは五言詩と大体同じだと言えるが、胡適によって分けられた行を見、行の二句の間の意味を分析してみると、十言の四行の

詩だと言ってもよいであろうか。原文は縦書きであったが、ここでは横書きにして、『新青年』で収録された形を保存する。

「朋友」（此詩天憐為韻、還單為韻、
故用西詩寫法、高低一格以別之）

兩個黃蝴蝶 雙雙飛上天
不知為什麼 一個忽飛還
剩下那一個 孤單怪可憐
也無心上天 天上太孤單³

括弧の中の意味は、第1句⁴の最後の「天」と第3句の最後の「憐」と押韻にし、第2句の最後の「還」と第4句の最後の「單」と押韻する。そのため、西洋詩の書き方を用い、(本来縦書きであった組版である)「高低一格」(同じ高さではなく、一文字ずれの高さをつける)をもってとくに区別しているということである。

現在の新詩は韻律、形式などの旧詩の規則を無視し、現代中国語の言語の特色に合わせて作られているから、「蝴蝶」の試みは大きな変化だと思われなくてもいい。しかし、旧詩の規則によると、1句おきに押韻するのは間違いであり、即ち「天」と「還」という脚韻で押韻し、「憐」と「單」という韻脚で押韻する規則である。『王力詩論』の「中国格律詩的傳統和現代格律詩的問題」によると、次のように言う。

「五・四」以後、ある新詩は押韻している。しかし彼らの押韻の方法はしばしば西洋のを模倣するものだ。……その他例えば「随韻」(二句をおき韻を換える)と「交韻」(第一句と第三句とを押韻し、第二句と第四句とを押韻する)は、我が民族の形式と比較的に近いが、なお完全にはなっていない。⁵

胡適は「蝴蝶」の中で、第1句と第3句とを押韻にし、第2句と第4句とを押韻する。上の『王力詩論』によれば、「交韻」は中国伝統的な「押韻」の詩法にないもので、西洋詩法を模倣しているものである。

また、中国伝統的な詩法では、「高低一格」にする必要がないと思われる。胡適は括弧の中で明らかに「そのため西洋詩の書き方を用い、〈高低一格〉を区別している。」と書いている。胡適は『胡適口述自伝』で、アメリカのコネル大学で四年生の時、ブラウニングに関する「捍衛ト郎吟的樂觀主義」⁶(In defense of

Browning's optimism)という論文で、ブラウニング文学論文奨金(Hiram Corson Prize on Robert Browning)を獲得したことがある。胡適はブラウニングに影響を受け、詩作に応用した可能性が考えられる。

『嘗試後集』²⁷の中で、ロバート・ブラウニング(Robert Browning)(1812-1889)の訳詩「你總有愛我的一天」の後に、英文の原作が付いている。一段だけ取り上げてみる。

You'll love me yet;-And I can tarry
Your love's protracted growing:
June rear'd that bunch of flowers you carry,
From seeds of April's sowing.²⁸

上のブラウニングの詩のような、鋸型の句の配列を胡適が模倣して「蝴蝶」という詩の句の配列に使ったと思われる。このことから、「蝴蝶」は胡適の最初の白話詩であり、同時に中国で西洋詩法を応用した最初の白話詩だと考えられる。

次に、「他」に見られる西洋詩の応用が何であるかを見てみる。「他」の中に最後の一字がすべて、「他」という字が繰り返して現れている。最初から「他」を「国」に擬人化し、繰り返して「他」を愛すれば、どうすれば良いであろうかという重複の技巧が使われている。それは近代詩において「重字」の禁忌を犯すことであるが、胡適の新しい試みであるとはいえ、ここには西洋詩法の直接の応用は見当たらないと考えられる。そのため、胡適は「再版自序」で「蝴蝶」と「他」以外の詩には旧詩の影響があると述べたが、「他」を『嘗試集』の第四版に入れずに削除した。これが一つの理由だと考えられる。リズムと西洋詩法の応用という二つの尺度で「他」を考察し、「蝴蝶」と比べてみると、「他」のリズムは「蝴蝶」のより伝統詩と異なるものが多い。その一方で、胡適は「蝴蝶」における題名、詩の句の配列、押韻などの積極的な工夫を行っている。また、「蝴蝶」は胡適の記念的新詩の第一作目として価値が有る。「他」を削除した理由は、新しい試みを駆使しているものの、それが十分成功していないところにあるだろう。

次に「贈朱経農」に西洋詩の応用があるか否かを検討する。『新青年』に載せられた「贈朱経農」を参照してみると、違いは行を分けないことだけである。中国伝統的な詩は縦組みであり、句読点がなく、句という一つの単位で行を変

えない。「贈朱経農」は縦組だから、字の右に(横組にすると、字の上に)圈点が付けられている。伝統的な詩と違うところだけでは、西洋詩法を使ったと言えないであろう。

第一編の詩の中で、他の詩に西洋詩法の応用があるかもしれないが、ここでは代表的な「蝴蝶」、「他」、「贈朱経農」だけを分析してみた。以上の分析により、第一編の詩において西洋詩法の応用は少ないが、しかし胡適が中国伝統詩から脱出して、白話詩を作るには、意識して西洋詩を手本として白話詩を作った場合があり、また新しい試み、新しい言葉を取り入れた、と言える。

3. 第一編の詩における伝統詩の伝承

第一編の「蝴蝶」、「他」、「贈朱経農」を取り上げ、リズム、西洋詩法の応用という二つの尺度で分析をしてみた。リズムの分析において、第一編の詩は大體中国伝統詩のリズムと同じである。第一編の22首の詩の中に、旧詩の五言詩と似る10首の五言の詩が有る。その中で旧詩の五言詩のリズム「○○—△△△」(二・三)だけではなく「●○○—△△」(三・二)もよく見える。旧詩の七言詩と似る七言の詩が3首だけある。そこには主に旧詩の七言詩のリズム「○○—○○—△△△」(二・二・三)があり、また「○○—○—▲△△△」(二・一・四)、「○○○○—△△△」(四・三)、「○○—○○●—△△」(二・三・二)、「●—○○—△△△△」(一・二・四)というリズムもある。「●—○○—△△△△」(一・二・四)というリズムは「孔丘」の詩句「亦“不知老之將至”」だけに表れる。白話詞は5首ある。残る4首の詩は「黄克強先生哀辞」の九言からなり、「論詩雜記」(3首)の一つの十三言及び二つの十四言からなる。明らかに伝統的な詩のリズムと違う。

以上のまとめにより、五言の詩はリズムの変化が少ない。七言の詩は3首の中で「贈朱経農」だけ、変化したリズムが多い。白話詞はリズムが変わらない。残る他の詩は中国伝統詩の形式を破り、字数も揃ってないが、しかし第一編の詩を代表するものとは言えず、文言がまだよく使用されているので、ここで分析しないことにする。

また、第一編の「蝴蝶」を分析した結果、西洋詩法の応用があると分かった。22首の中で、西洋詩法の応用は多くないと言えるが、しかし胡適には積極的に「蝴蝶」に西洋詩法を使おうという意識があったことがうかがえる。

胡適はアメリカで1916年8月23日²⁹⁾に正式に白話詩「蝴蝶」を作った。1917

年9月帰国する前に、実験の精神でこの第一編の詩を試して作った。胡適は帰国する前に、当時彼の文学理論「文学改良芻議」という思想を形成し、『新青年』で発表して文学革命を提唱した。その中の「典故は用いない」、「対句を考えない」、「俗語俗字を避けない」という詩法での改革は、第一編の作詩の過程で胡適によってほぼ守られている。胡適も「自序」で次のように言う。

私がアメリカで作った『嘗試集』は、確かにただ『文学改良芻議』中の八項目をやっと実行しただけで、間違いなく旧詩の影響があるもの、というにすぎない。その詩の大きな欠点は依然として五言、七言の句法を使っていることである。句法が非常に整然としているため、言葉の自然な流れに合わなく、五言、七言の句法に妥協するために、長いところをとって短いところを補わないといけなかったし、時々白話の字と白話の文法を犠牲しないとけなかった。³⁾

アメリカで一人で白話詩を作ろうとした胡適は、中国には昔から白話詩があるという事実を証明するために、宋詩を探して取り上げた。そのため自然に旧詩の影響が出てきたと考えられる。当初、胡適は文言文だけではなく、白話でも詩を作れるという考えを証明したかった。つまり、胡適の最初の白話詩に関する定義は、白話を用いて詩を作るということである。だから、胡適は自分がアメリカで作った白話詩は、中国伝統詩から新詩に変わる過渡期の創作として価値がある、と認識していたのであろう。

第一編の詩の分析を通し、胡適には白話詩を如何に中国伝統詩の影響から脱出させるかという創作意識はそれほど強くないと言える。脱出のための新しい技法を把握できていないために、できるかぎり白話で新詩を作ってみたのであろう。そして時には、胡適は積極的に意識して西洋詩法を第一編のいくつかの作品に採り入れ、新しい試みと新しい言葉を試用したと言えよう。

注

- 1 「胡適の『嘗試集』」(山口栄、跡見学園女子大学『人文学フォーラム』第二号、p.19、2004年3月15日、)は再版時間は1921年だとしているが、『胡適全集10』と『胡適文集』(欧陽哲生編、北京大学出版社、1998年)により、そして、再版の「再版自序」が書かれた時間は1920年8月4日であり、1920年8月15日(『嘗試集』(人民文学出版社、1984年2月)で載せられている時間は1920年9月15日)一言を加えている。「这半年以来,我做的诗很少。现在选了六首,加在再版里。」(筆者訳:この半年以来、私が作った詩は大変少ない。現在六首を選んで、再版

の中に加える)。

- 2 『胡適全集 10』、季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第1版。『胡適全集 10』に収録されたのは、「嘗試集」、「嘗試後集」、「集外詩」、「散文編」と「小説編」というものである。『胡適全集 10』に収録される『嘗試集』は、上海亜東図書館に1920年3月から1922年10月の間に出版された四つの版に基づき、第四版に削除された詩も保留して編集されたものである。
- 3 『新青年』第3巻第4号（1917年6月1日発行）では、胡適の『采桑子・江上雪』『生查子』『沁園春・生日自寿』『沁園春・新俄万歳并序』が載せられ、標題は「白話詞」であり、詩の名前も詞牌の一つである。その後、『采桑子・江上雪』以外の詞が『嘗試集』の第一編に入れて刊行された。『胡適全集 10』の『嘗試集』第一編の詩の中に、五首の白話詞が有る。本論文は分量の原因で、白話詞の分析を省略する。
- 4 胡適の『嘗試集』について分析の中で、「句」と「行」の規則という尺度が設けたが、『嘗試集』の第一編と大きな関係がないと考えられ、本論で省略する。今度第二編、第三編について分析の中にまだ取り入れたい。
- 5 『談新詩』についてで、胡適は詩の作法は押韻(踏韻)にこだわらないことを論じた。しかし、『嘗試集』の第一編の詩は胡適がまだ押韻(踏韻)に気を付け、白話詩を作っていたと考えられる。そのため、『嘗試集』の第一編の詩を分析する時、胡適の押韻(踏韻)の使い方にも言及する。
- 6 「蝴蝶」、1916年8月23日作。最初「朋友」という名前で『新青年』第2巻第6号(1917年2月1日発行)掲載され、『嘗試集』に収録した時、「蝴蝶」という名前に換えた。底本は、『胡適全集 10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.50)。
- 7 「他」、1916年9月6日作、『新青年』第2巻第6号(1917年2月1日発行)。
底本は、『胡適全集 10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.53)。
- 8 「贈朱経農」、1916年8月31日作、『新青年』第2巻第6号(1917年2月1日発行)、
『胡適全集 10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.51)。
- 9 「再版自序」、1920年8月4日、『嘗試集』の第二版。底本は、『胡適全集 10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.34)。
- 10 「四版自序」、1922年3月10日、『嘗試集』の四版。底本は『胡適全集 10』(季羨林主編安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.43)。
原文：内中虽然还有许多小脚鞋样，但他们的保存也许可以使人知道缠脚的人放脚的痛苦也许还有一点历史的用处，所以我也不避讳了。
- 11 「逼上梁山」(『東方雜誌』第3巻第1期、1934年1月1日)で胡適は1916年8月23日二羽の胡蝶を見、自分の白話詩の考えが認められない孤独感に溢れ、「蝴蝶」を作ったとする。底本は『胡適文集 1』(欧阳哲生編、北京大学出版社、1998年)。
- 12 『葺暉室札記』巻14(p.1007)によれば、「蝴蝶」最初の名前は「窓上有所見口占」、次に「朋友」という名前に換え、『新青年』第2巻第6号で発表された。(『胡適伝』、易竹賢、湖北人民出版社、1998年9月、p.186、孫引き)。

- 13 「自序」(1919年8月1日作、『解放與改造』第1巻第1号、1919年9月1日)において胡適は「作詩如作文」としたが、白話を詩に入れるとしたら、永遠の価値がない、と友人に反対された。底本は、『胡適全集 10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.15)。
- 14 『胡適伝』、易竹賢、湖北人民出版社、1998年9月、p.161。
- 15 「登鶴雀楼」、王之涣、『王力詩論』「詩律」(張谷編、広西人民出版社、1988年8月、p.101)による。
- 16 「春望」、杜甫、『王力詩論』「詩律」(張谷編、広西人民出版社、1988年8月、p.111)による。
- 17 「再版自序」(1920年8月4日、『嘗試集』の二版、『胡適全集 10』、季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.42)の原文は、「我只怕那些乱喝采的看官把我的坏处认做我的好处，拿去咀嚼仿做那我就真贻害无穷，真对不住列位看官的热心了！」である。
- 18 「回郷偶書」、賀知章、『王力詩論』「詩律」(張谷編、広西人民出版社、1988年8月、p.123)による。
- 19 「無題」、李商隱、『王力詩論』「詩律」(張谷編、広西人民出版社、1988年8月、p.115~p.116)による。
- 20 『新青年』、陳独秀主編、上海書店 1988年6月。
- 21 『中国語辞典』、伊地智善繼編、白水社、2002年2月5日発行、p.1200。
- 22 『中国語辞典』、伊地智善繼編、白水社、2002年2月5日発行、p.1849。
- 23 「朋友」、『新青年』第2巻第6号、1917年2月1日発行、陳独秀主撰、上海書店、1988年6月。
- 24 中国伝統詩では、行は句の単位として見られ、行の末に来るとその句の終わりを意味する。つまり、伝統詩の句は行を単位とし、一句は一行で表わす。
- 25 「中国格律詩的伝統和現代格律詩的問題」(『王力詩論』、張谷編、広西人民出版社、1988年8月、p.13)。原文：“五・四”以后，有些新诗是押韵的，但是它们的押韵方法往往是模仿西洋的。……其他象“随韵”(两句一转韵)和“交韵”“第一句和第三句押韵，第二句和第四句押韵”，虽然和我们的民族形式比较地接近，也还不见得完全合适。
- 26 『胡適口述自伝』第四章(唐徳剛訳注、台北伝記文学出版社、1981年2月)の注によると、胡適は他の著作でブラウニングを「白郎寧」と訳したこともあるが、『留学日記』で「卜郎吟」と訳している。『胡適口述自伝』の内容においてよく『留学日記』と関わることが多い。だから、「卜郎吟」という訳名を使うとする。底本は『胡適文集 1』(欧陽哲生編、北京大学出版社、1998年、p.225)。
- 27 『嘗試後集』(『胡適全集 10』、季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第1版、p.201~p.350)。
- 28 「YOU'LL LOVE ME YET」、Robert Browning。胡適が1925年5月訳したブラウニングの「你總有愛我的一天」の原文である。『嘗試後集』(『胡適全集 10』、季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第1版、p.214)。
- 29 『嘗試集』の「自序」により、1916年7月から胡適が友人と白話文学を討論し、

すでに友人に白話で「嘲諷詩」(satire)を作って送っていた。例えば：「人閑天又涼”，老梅上戰場。拍桌罵胡適，說話太荒唐！」という一千字の詩である。胡適は「白話遊戯詩」と言い、また7月26日叔永に送る手紙の中で「これから文言詩を作らないと誓い」、と述べている。

- 30 「自序」、1919年8月1日作(『解放與改造』第1巻第1号、1919年9月1日)底本は、『胡適全集10』(季羨林主編、安徽教育出版社、2003年9月第一版、p.29～p.30)である。原文：我在美洲做的《尝试集》，实在不过是勉强实行了《学改良刍议》里面的八个条件；实在不过是一些洗刷过的旧诗！这些诗的大缺点就是仍旧用五言七言的句法。句法太整齐了，就不合语言的自然，不能不有截长补短的毛病，不能不牺牲白话的字和白话的文法，来牵就五七言的句法。